



Dale Pastoral Center

DPC ニュースレター

2022 年 12 月 1 日 第 9 号

PGC 発足 40 年そして閉所 10 年の今年、PGC から DPC へとその働きを支えてくださった方々の言葉を寄せていただいています。本号ではケネス・デール先生から貴重な原稿をいただき感謝申し上げます。今、先生が抱く思いが、気迫さえ感じさせるほどにあふれています。また本号では、PGC においてデール先生と共にグリーフの働きにご尽力された石井千賀子先生より喪失の悲しみといかに共に歩み、再びの力を得るか、誠実に負ってこられた歩みを綴っていただきました。

わたしについて来なさい



ケネス・J・デール



はじめに

このたび、私と PGC そして DPC とのつながりについて人生総まとめの思いを語るようにと原稿を依頼されました。その時、私にはもう特別申し上げるようなことはないと思いました。DPC ニュースレター 8 号とこの 9 号に、こんなにも思慮深い文章を書いてくださった友人たちの洞察を心からありがたく思っています。けれどもやはり私は、いくつかの点について、ある視点に着目して書いてみたいと思います。今年 40 周年を迎えたこの働きの「父」とも呼ぶべき方の視点です。

1. 私たちの選んだ名まえ「人間成長とカウンセリング研究所」

この研究所の構想に取り掛かる際の難問が、その名称をどのようにするかということでした。

どうしてこんな風変わりな、「人間成長とカウンセリング研究所」などという名まえに着地したのでしょうか。

私は日本語のネイティブスピーカーではありませんが、「人間成長」にしろ「カウンセリング」にしろ、ほとんどの日本人にとって温かみも親しみもない言葉であると思います。それなのになぜ私たちはこういう言葉を選んだのでしょうか。

そう、私たちには新しい概念を提供したいという思いがあったのかもしれませんが、つまり、私たちの人生において目指すべきは「ひとりの人として成長する」ことである、という考えです。

私たちは誕生した時に、創り主から確かな可能性をいただいている、と私は信じています。そして与えられた生のすべての面で健全なる成

長をすることが、私たちにとっては挑戦であり責任であり、また喜びでもあるのです。成長とは、体重が増えるということでもなく、より美しくなるということでもなく、地位が高くなったり銀行の預金残高が増えたりというのでもありません。違います、私たちがこの「人間」という言葉で意図するものは「全人的な」成長なのです。

PGC では一人ひとりの生における霊的な面に特に重きをおきました。つまり私たちは、人の思考や感情、人生における価値観や生き方、誰かを大切にすることや愛すること、こうしたさまざまなことに目を留めたのです。

これらの面で、私たちは人生を通じて退行することも成長することもあります。より良く生きるためのリソースとなるこういったことを見出すことのできる場はなんと少ないことでしょうか。

教会はそれが可能な場所であると私は信じていますが、教会にはあまりに多くの宗教的側面があるために、普通の人は教会に行くのを躊躇してしまいます。ですから、私たちはこの「人間成長」というアプローチによって、霊的な導きと祝福とを、より良く生きたいと願う多くの人々に届けたいと考えたのでした。

「カウンセリング」という言葉。これもまたなじみのない「カタカナ言葉」でしたが、この言葉をより親しみやすいものにすることに、私たちは貢献できたと思っています。この言葉は心理学や心理療法に密接に関わる言葉でしたから、たいていの日本の方はそのような、いわば「内面に踏み込まれること」に対して少しばかり警戒心もあったでしょうし、また不安もあったことと思います。しかし私は思うのですが、私たちのプログラムを通じて、自ら進んで自己理解と人間関係を探求したいと考える多くの人に、健全な成長と祝福をもたらすことができたのです。

「人間成長」と「カウンセリング」と訳されたこの二つの意義ある英語の言葉が日本の友人たちにとっても等しく意味のあるものであること、このことは私の心からの願いなのです。

2. PGC から DPC へ

皆さんはおそらく、私が PGC から DPC への『変容』をどんなふうに感じているかということにご関心がおありでしょう。前号の DPC ニュースレター（第8号）をお読みになっていれば、いくつかの意味深い見解をお読みいただいたことと思います。以前の組織 PGC（人間成長とカウンセリング研究所）から現在の組織であるデール・パストラル・センターへの重要な変化についての見解です。この点を再度取り上げる必要はありません。過去と現在この働きに努めてこられた3名の優れた導き手が語る意義ある言葉を、どうぞよくよくお読みいただければと思います。

そういうわけで、ここでは、私がやや違った視点から短くお話することをおゆるしてください。

まず、私は上述の記事を書いたくださった3人のお一人おひとりをこの上なく尊敬しているということを申し上げたいと思います。

賀来周一先生は創設以来私の右腕として助けてくださったばかりでなく、PGC のプログラムを開発してくださり、また長年にわたっての指導者でもありました。賀来先生は非常に優れた話し手であり書き手であり、そしてまた私の個人的な友人であり同伴者でいてくださいます。賀来先生がいなければ PGC はその功績を成し遂げることなどできませんでした。賀来先生、感謝します。

次に、私は皆さんにジム・サック先生の記事を読んでいただきたいのです。なぜなら、この記事はジムならではの独特の思考と行動を示していますから。この文章の中で彼は「エッサイの根」(旧約聖書、ダビデ王の父であるエッサイ)

を PGC と DPC の関係を示す隠喩として用いています。王とその子どもの関係は、彼ら3人が果敢にも、新しい子ども、つまり DPC が生まれるにあたってその産みの苦しみを目の当たりにした道のりを物語るようなものです。

そして、私は、特別な感謝を齋藤先生に申し上げたい。先生はさまざまな面での貢献をしてくださり、現在は DPC の所長をしてくださっています。私は長い年月にわたって齋藤先生の信仰と洞察と指導力が増すのを見てきました。DPC には、齋藤先生の導きのもとに希望と実りを約束された前途があります。

他にも多くの方々のお名前を長年の実質的な指導者また支援者として挙げなければいけません。そのお一人が石居基夫先生です。石居先生は設立当初の DPC に明確な目標を示し、率いてくださいました。石居先生、ありがとうございます。

そしてもうお一人は、長いこと表舞台にはお出になりませんが、清重尚弘先生です。彼なくして PGC が「離陸」することはあり得ませんでした。始まりの頃に彼の学長としてのダイナミックな指導力とサポートがなかったなら私たちが成功することもなかったかもしれないのです。清重先生、先生は今では私と同じくリタイアされていますけれども、あなたが大学付属の研究所としての PGC に示された、そしてまた私個人に対しても示してくださったお気持ちを忘れることはできません。

その他たくさんの方のボランティアとして多くの役割を担ってくださった友人たちをすべてここで紹介することはできませんが、お一人のお名前を挙げるとするなら、それは深澤諄子さんです。深澤さんは私たちのオフィスの忠実なるマネージャーとしていわば「すべてをまとめて」くださいました。諄子さん、ありがとう。あなたは PGC で奉仕してくださった間一生懸命にその実務能力を発揮してくださいました。



PGC から出発した DPC が育ってきた中で、その「変遷」あるいは「変容」といったことについて個人的なことを申し上げなければなりません。いくばくかの悲しさ、そうです。いくらかの喪失感、それもあります。そして、そう、強い郷愁も。しかし、機関や組織というものは時代の変化に伴って変わらなければならないものです。この「時代の変化」については私の同僚たちが述べてくれています。

ある賢明な人が言いました、「チャレンジするとは、問題を避けることなく、問題を解決することだ」と。私はこれらの指導者たちの小さな群れは実にすばらしい仕事を成し遂げてきたと思います。彼らは大きな問題に直面しながらも、PGC という粘土を、主のご用に役立つ新しい道具のかたちに造り上げました。特に牧師のための研修を行い、それによってこれからの長い年月にわたって、その牧師たちがそれぞれのコミュニティにおいて光をもたらすというわざをなせるようにしました。PGC の築いた価値ある原点は DPC の基本的な価値観に引き継がれています。それはすなわち、私たち自身が神の愛を受けとめ、その愛を他者と分かち合うということなのです。そしてこのことのゆえに私は神に感謝するのです。

3. 私の人生における

「人間成長とカウンセリング」とは

現在私は 96 歳です。「人間成長とカウンセリング」は私自身の人生にとって引き続いて関連があるのでしょうか。今こうして書いていることが、DPC ニュースレターに記された将来の指導者たちに向けての、私からの何か「サヨナラの歌」や「お別れのスピーチ」のようなもので

あることは否めません。皆さんには、私が現実の DPC について語ることはできないことをご理解いただくなくてはなりません。私は DPC が実際に生み出されるよりも前の 1996 年に東京からカリフォルニアへ引退しました。ですから、その後現在に至るまで指導的役割を引き受けてくださったより若き同僚たちに語っていただくようお願いすることがふさわしいと思うのです。

PGC で働いたという経験は、関わる一人ひとりによっておそらくその意味合いが異なることでしょう。しかし、私にとってはどうだったのでしょうか。過去だけでなく今の私にとってもどんな意味があるのでしょうか。何よりもまず、私が深く感謝したいことがあります。それは新しい組織に私の名まえを加えてくださったことです。「デール」・パストラル・センターです。このように名付けてくださったことはとりもなおさず皆さまの私に対するよきお心遣いであると思いますし、また、それは私たちが1982年に PGC を創設した時の初心を引き継いでくださろうという思いの表れでもあると受け止めています。身に余ることではありますが、私に対して、そして私たちが教え、示そうと試みたことに対してこのようにご配慮くださったことを心より感謝しています。

私の妻エロイーズは1年前に天に召されましたが、私と共に喜んでくれていることと思います。彼女は 72 年間私の誠実なパートナーでした。ありがとう、エロイーズ。

4. わたしについて来なさい

さて、最後に少し考えてみたいと思います。96歳になるって、いったいどんな気がするか、不思議に思われませんか。私が今思うことを書いてみましょうか。私が96歳だなんて、ありえない！今、私が考えていることは40年前、56歳の時とたいして違っているとは思えませんし。

しかし、正直に胸に手を当てて考えるならば、

私は自分のこの体には、もうそれほど長いこと命が残っているわけではないとわかっています。ちょうど今、私は2ヵ月前ひどく転倒した事故からゆっくりと回復しているところなのです。両手首を骨折したものですから、この文章をタイプするのも痛いのです。この年齢では外的、内的どのような災難、事故であっても立ち直るには時間がかかります。これが年を取ることのたくさんのネガティブな側面の一つです。でも、皆さん、耐えましょうね。私たちはみんな同じように年を取っているのですから。

さあ、もう一度確かめましょう。「人間成長」ということが、今の私にとって何か意味があるのでしょうか。私は喜びをもって答えることができます、「そのとおり」と。

私の最新の著書（*Where in the World is God? Reflections on the Sacred Mystery*、日本語版「神はいずこに 聖なる神秘の黙想」）に書いた言葉を使わせてください。私は、人間存在には二つの大きな神秘があると信じています。それは誕生と死です。どちらも等しく謎であり、説明のできないことです。私は人生という挑戦に向かってほとんど1世紀もの間「成長」し続けています。今や私は老いていく時にあります。いえ、それとも、「死に向かって成長している」とでも言いましょうか。そうです、死へと成長しているのです。死とは、かくも究極で、神秘的で、生の始まりの瞬間と同じくらい説明不可能な瞬間なのです。96年間も私をとらえて離さないこの神秘が、今もなお私の死後も私を成長させるために存在することは、私にとって生きる喜びであり、また死の喜びでもあります。

ご自身を「復活であり、命である」と呼ばれたそのお方が、なおも私を召してくださっています。そして、私だけではなく私たちのすべてを。はるか昔になさったように、あの温かな招きの言葉で召してくださるのです。「さあ、わたしについて来なさい！」（日本語訳：事務局）



PGC から DPC への 40 年

グリーフサポートの活動を通して振り返る

石井千賀子



始まりの頃

40 年前の 1982 年秋に PGC の開所式が、やわらかな日差しが差しこむ大教室で開かれ、その門出が祝福されているように感じたのを私は今も思い出します。

間もなくカウンセリングの実習のクラスが始まりました。PGC の所員の一人として私は、デール先生、賀来先生と共に午前のクラスを担当しました。それぞれのグループには 20 名近く受講生が集いましたが、そのなかにはルーテルの他さまざまな教派の教会員も参加していました。

その後、私は 1990 年から米国の大学院に入学のため PGC の活動から離れましたが、その実習先の一つとして、ホスピスで、死別をした子どもと家族のサポートグループの活動に 3 年間携わりました。4 年後に帰国した際に、1991 年度の PGC 運営委員会にて『悲嘆にくれる人々へのサポートグループ』を行うことが PGC の働きの将来計画の一つとして討議されていたことを知りました。



被災地での取り組みから

私が帰国した 3 ヶ月後の 1995 年 1 月に阪神淡路大震災が起こりました。阪神電鉄の沿線に建っていた西宮ルーテル教会の周辺では、震災直後の火事は免れたが、家屋の全壊、一部倒壊等により住民が亡くなったり、住まいを追われたりする人々がいました。また、自宅に住み続ける人々も、近くを流れる川からバケツで汲んで生活用水をまかなうなど、被災者は悲しみと

不安の中に過ごしていました。そのような地域の人々にサポートの手を差し伸べようと、PGC は西宮ルーテル教会の牧師と教会員の理解を得て、短期間カウンセリングの活動をしました。私は子ども向けのグリーフサポートのグループを担当しました。お友だちを亡くした子どもたちが集まり、絵を描いたり、お友だち宛に書いた手紙を手作りの灯ろうにのせて流したりしました。保護者のなかにはカウンセリングに見えた方もいました。

この西宮でのささやかな子どもへのグリーフサポートの試みが、その秋には研修会を開催するなど、大きな一歩へとつながりました。同年 1995 年 10 月 9 日~10 日に「『死別を体験した子どもたち：心のケアとサポート』専門研修」が東京三鷹の日本ルーテル神学大学で開催されました。この研修会には米国で子どものグリーフサポート活動を率先する西海岸ポートランド市のダギーセンターのトレーニング・ディレクターのシンシア・ホワイト氏が招かれました。200 名ほどでの出席者で会場は熱気に包まれていたのを思い出します。

その研修会の日本語資料には、
会場：日本ルーテル神学大学
主催：日本ルーテル神学大学 社会福祉研究室、同大学付属『人間成長とカウンセリング研究所』と記されています。なお、裏表紙には大学の名称がその翌年 1996 年 4 月にルーテル学院大学と変わることも記されています。



確立した歩みへ

PGC では、その 1996 年からグリーフサポートに関する勉強会が定期的に開かれました。そして大人向けの「身近な人をなくした思いを語り合う会」が 1997 年 10 月に始まり、その後延べ 180 回開催されました。

子ども向けには、1998 年 2 月に「だいじな人をなくした子どもの集まり」が、そして同じ時間

帯に保護者の会が開催されました。その後 2012 年 7 月に PGC が閉所したことに伴い、数ヶ月の間において、子どもの集まりと保護者の会の活動は DPC へと引き継がれ 24 年後の現在も定期的に開催されています。

この「だいじな人をなくした子どもの集まり」の様子が 2005 年に発刊された 2 冊の冊子に詳しく映し出されています。

その 1 冊「思いっきり会いたい：大事な人を亡くしたあなたへ」（2005）には、

〈大事な人が亡くなったとき、こんなふうに感じたり、体にあらわれたりすることもあるんだ〉という紹介文に続いて、子どもの声が挿絵とともに載っています。

〈『頭の中にイガイガのボールが
走り回ってるんだ』
『永遠の眠りについたって言われたんだけど
ずっと 起きてこなかったよ』
『学校で「大丈夫？」って聞かれたのイヤだった』
『何にも言われもないの イヤだった』
『また 誰かが死んじゃうのかな』
『お父さんにお母さんのこと
聞きたいけど聞けないんだ
お父さん 悲しむかもしれないから』
『^{あったま}頭くる！ウザ〜イ』
『いろいろな思いが
あっていいんだよ』



もう 1 冊の「大事な人を亡くしたご家族へ」（2005）は保護者向けにまとめられています。その目次は以下の通りです。

1. はじめに
2. 死別後の変化：保護者、子ども
3. 死別後のとまどい：保護者、子ども
4. 死別後の対応：保護者、子ども
5. 死別後の対応：具体例
6. 援助する方へ：保護者を援助する方へ
子どもを援助する方へ
7. PGC の援助体制
8. 発達段階における死の理解と表現
9. 気づいてみよう
10. 参考図書
11. おわりに

これら 2 冊は独立行政法人福祉医療機構（子育て支援基金）の助成を受け発行されました。当時のコミュニティの期待を読みとることができます。

また、グループの参加者のなかには、グリーフのサポートグループと並行して、PGC の個別のカウンセリングを受けた家族もいました。死別後、数ヶ月にわたって学校へ行くことができなかった子どもが、同じような体験をした子どもたちのグループに参加して、仲間と遊んでいる様子が見られるようになりました。その後、家族の希望で子どもも親もそれぞれにプレイセラピーと家族カウンセリングを受けたところ、親子関係に小さな変化が見られたという報告がありました。そしてその数ヶ月後に登校し始め、休まずに通っているということでした。（石井、左近、2008）

このように PGC そしてその後の DPC に引き継がれた子どもの集まりの意義について、小嶋と石井がまとめた論文があります（ルーテル学院研究紀要、2015）。

「子どものグリーフサポートグループの意義を考える：ルーテル学院大学および日本ルーテル神学校における 17 年間の子どもの集まりの取り組みを通して」と題する論文には、喪失体験後に子どもが示す 3 タイプの SOS 反応をはじめ、PGC の子どものグループのサポート活動を支える二つの柱が書かれています。

その柱の一つはファシリテーター養成研修です。もう一つの柱は構造的な枠組みを大切にした実践活動、具体的には「『始まり』と『終わり』を毎回明確にしたプログラムの提供」、「8 つのルール」、そして「ファシリテーター同士でグループの当日に行う 2 回のミーティング」をあげています。ほぼ四半世紀にわたる 100 回以上の「子どもの集まり」の開催継続と普遍的なプログラムの提供を可能にしている主軸はこれらの柱と言えます。(p.85)



蒔かれた種が育ちゆく

この「子どもの集まり」に 10 年以上前に参加していた親子が当時を振り返って寄せられた思いがこの論文に寄せられています。その一部をここに紹介します。

〈「私にとっての集まりの存在・現在の自分への影響」(現在 20 代になった女性 A さん)

私にとって集まりは一言で言うと『安心できる場所』でした。……集まりで過ごす際のルールのうちの一つが好きでした。「話したくないことは、話さなくていい」が私を一番安心させました。そんなことを言われたのは、初めてだったのです。「聞かれたことには答えなければならない」と思っていたのです。……この集まりの安心できる環境で、大人や友人とリラックスして過ごすことで、父が亡くなった以前の私を取りもどせたような気がしました。

……普段、亡くなった人のことを話すのは、いけないことのような気がしていました。家族

や親戚の前で話したら悲しんだり、泣いたりする人がいる。大切な人を亡くしたことのない同世代の友人には、気をつかわせたり、びっくりさせたりなど困らせてしまう。なにより、亡くなった人のことを話題に出すだけで、その場の空気がピンと張り詰めるのを感じていました。また自分では言語化できないことを友人が話していたりすると、「私のこの心の思いはそういうことだったのか!」と発見があったり。また辛くて言えないというときは無理して言わなくてもいい、というルールがあることによって安心して話すことができました。この体験はこの集まりでしかできなかったことです。〉

このように PGC が蒔いたグリーフサポートの種が、いま DPC にしっかりと受け継がれていることを、改めてみなさんにご紹介するこの機会を与えていただいたことに感謝します。



参考図書

石井千賀子、左近リベカ、「親を亡くした子どもと家族への統合的グリーフ・サポート：プレイセラピーと家族療法を行った事例を通して」臨床死生学. 13:91-97. 2008

石井千賀子、左近リベカ、「子どもの悲嘆とその対応：積極的な受け身の姿勢で寄り添う」緩和ケア. 20: 343-347. 2010

小嶋リベカ、石井千賀子、「子どものグリーフサポートグループの意義を考える：ルーテル学院大学および日本ルーテル神学校における 17 年間の子どもの集まりの取り組みを通して」ルーテル学院研究紀要. 49. 79-88. 2015

だいじな人をなくした子どもの集まり&だいじな人をなくした子どもの保護者のための集まり

【今後の開催予定】

2023 年 1 月 28 日(土)、3 月 25 日(土)

いずれも 13:30-16:00

詳細は DPC ホームページをご覧ください。





今、医療や福祉、臨床心理などの現場でも、私たちがスピリチュアルな痛みやニーズを持つ存在であると考えられ始めている。単に、病気という身体的な課題や、生活上の困難、あるいは心理的課題に治療や専門的援助をするということだけでなく、困難を抱えるその人の全体的ケアが求められ、考えられるようになってきたということだ。生きる意味への問いや、不条理の問い、死後への問いとか、罪責意識など、「人間実存」の深い問いが、スピリチュアリティの問題として理解されてきている。

伝統的に宗教が担ってきた人間実存の深い領域への関わりを、個々の宗教独自の世界の中で完結させるのではなく、より一般的概念として語ることが必要とされてきたのは、世俗化した現代における人間と宗教の関係の葛藤がもたらした必然かもしれない。そうであれば、キリスト教の牧会者という立場から、このスピリチュアリティとは何かということを探求し、現代に新しい形で宗教(キリスト教)の持つ意味を改めて見出す(語り・伝える)ことが求められているのではないか。著者のカブが試みているのは、まさにそういうことなのだ。しかも、かなり具体的な牧会(カウンセリング)の働きの中にこのスピリチュアリティの働きということを確認していくことになる。

例えば、「自己は、体系化の中心としての自己が感情や精神的生命の他の諸側面を超越するときのみ、スピリットである」と著者は言うのだが、私たちはより成熟した(他者、平和、世界などへの)愛に献身する者として、自己自身の願望を超越する時に真実のスピリチュアルないのちを生きると考えられている。そのために神の恩寵と召しを受けとり自己を熟視し、責任を持ってその自己の全体性を生きよう促すことが牧会であり、また牧会カウンセリングが一般的な心理学的支援と性格を異にするという。45 年も前に書かれたものだが、現代に生きる私たちが神(聖なるもの)と関係するというものの意味を新しい言葉で描きだし、実践的ケア(牧会)に息吹をもたらし、この探求に惹きつけられるに違いない。

(DPC 所員 石居基夫)



● 「神はいずこに 聖なる神秘の黙想」 ケネス・デール著、谷口真理子訳・DPC 監訳、キリスト新聞社

出版のお知らせ

お待たせしております本書がいよいよ完成目前となりました。来春発売の予定です。詳細は DPC ホームページにご案内をいたします。どうぞお楽しみにお待ちください。

● 第 5 回臨床牧会セミナー(第 57 回教職神学セミナー)のご案内(オンライン開催)

テーマ「暗闇の中で～助けを必要とする牧会者」

基調講演・石居基夫牧師(ルーテル学院大学、日本ルーテル神学校)

ファシリテーター・三村修牧師(日本キリスト教団佐渡教会)

日時: 2023 年 2 月 13 日(月)午後・14 日(火)午前

対象: 教職者・聖職者(プロテスタント諸教派、カトリック教会) 定員 40 名

内容、申込方法、費用等詳細は近日中にホームページに掲載いたします。

☆編集後記☆

本紙原稿のため、またご著書出版のためにデール先生とご連絡を密にする機会をいただきました。96 歳のデール先生がたいへんお元気でいらっしゃることは大きな励み、大きな喜びです。

クリスマスおめでとうございます。新しい年も皆様の日々に主の豊かな祝福がありますようにとお祈りいたします。

発行: 日本ルーテル神学校 附属研究所 デール・パストラル・センター 発行人: 齋藤 衛

181-0015 東京都三鷹市大沢 3-10-20 TEL:0422-26-4580(直通) E-mail: dpc@luther.ac.jp http://www.luther.ac.jp/